



ASAFAS

Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

2025

アジア・アフリカ地域研究研究科 概要



その問いが、私を動かしたつづける。

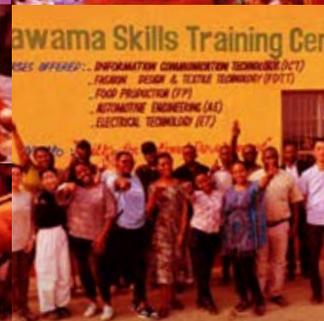
どうして惹かれてしまうのか。

なぜ、そこに向かうのか。



contents

- 02 来たれ! ASAFASへ
- 04 ASAFASの学び
 - 06 東南アジア地域研究専攻
 - 08 アフリカ地域研究専攻
 - 10 グローバル地域研究専攻
- 12 教員紹介
- 16 ASAFASの5年
- 18 院生たちの躍動
- 20 院生たちの進路
- 22 学生の受け入れ



来たれ! ASAFAS へ

ASAFASに集い、世界に羽ばたく

1998年の設立以来、ASAFASは一貫してフィールドワークを重視してきました。学生も、教員も、ASAFASに所属する研究者のほとんど全員が、フィールドワークを何らかの形で研究に織り込んでいます。このような組織は、世界的にも極めてユニークだといえるでしょう。文化人類学や生態学など、もともとフィールドワークを基礎とする研究分野だけでなく、実験系や文献研究の分野の研究者も、対象地域に出かけていきます。

その地の気候に特有の空気を吸い、土地の匂いを嗅ぎ、地域の食べ物を食べ、現地協力者と地域の言葉で語り合うことで生み出される研究成果は、そうでないものとは広さと深さにおいて大きく異なるのだとわたしたちは信じています。

このように、やや「とんがった」特徴をもつASAFASの教育・研究は、先頃のコロナ禍で大きな打撃を受けました。学生や教員の研究計画は、それぞれ大きな変更を余儀なくされました。いっぽう、オンラインツールを用いた遠隔調査や、SNSを研究対象にする新しいアプローチなど、海外でのフィールドワークを補完するさまざまな工夫がなされました。ASAFASの教育・研究は、

コロナ禍を経てたくましく成長したといえます。

ポスト・コロナ禍のいま、ASAFASもフィールドワークを再開しています。しかし、渡航費の高騰などで海外渡航をめぐる強い向かい風が吹いている状況です。資金や時間がかかるフィールドワークは、「コスパ」のよい研究手法ではないのかもしれませんが、わたしたちはやはり学生のみなさんに、現地でのフィールドワークを勧めます。

各国でナショナリズムの火の手が上がり、地域紛争、貿易摩擦、移民批判など、大戦期や冷戦時代に回帰するように国境の壁が高くなりつつあります。SNS等で根拠のない情報が飛び交い、世情に強い影響を及ぼすいま、あえて国境を越え、自らの身体で世界各地の現実を体験することの意義は、むしろ高まっているからです。

これからの世界を展望する鍵は、グローバルサウスに、アジア・アフリカにあるはずで。いまこそ、来たれ! ASAFASへ。

アジア・アフリカ地域研究研究科
研究科長 山越 言



3専攻・教員座談会

現地に学び・育てられる日々。

研ぎ澄ませた感性が羅針盤

フィールドワークを主軸とする5年一貫制のASAFAS。世代も専門も価値観も多様な4人の教員が集い、自身が学生だったころの経験と、学生たちを送り出すまごころを重ねつつ、フィールドワークの醍醐味を語り合った。その表情には、一人の研究者としてフィールドに立つよこびと覚悟、学生たちへのエールがあふれている

- ゲスト**
- 古澤拓郎
東南アジア地域研究専攻 教授
 - 平野(野元)美佐
アフリカ地域研究専攻 教授
 - 黒田彩加
グローバル地域研究専攻 准教授

- 進行**
- 池亀 彩
グローバル地域研究専攻 教授



池亀 ● 3専攻から、30、40、50代のお三方にご参加いただきました。未来の院生に向けて、まずは自己紹介から始めましょうか。

自分のペースで
5年間を設計できる自由度は
ASAFASの押しポイント!

古澤 ● もとは保健学が専門ですが、生態学などを含めた理系的視点から東南アジアとオセアニアの島嶼部で地域研究をしています。



黒田彩加

黒田 ● 中東・イスラム世界の宗教と政治との関係が専門で、主なフィールドはエジプトなどアラビア語圏の国ぐにです。

平野 ● 文化人類学が専



16世紀末、サファヴィー朝の首都だったイスファハーン。その繁栄ぶりは「イスファハーンは世界の半分」と賞賛された



カメルーン最大のモコロ市場での聞き取り調査の後、商品の薫製魚を前に、売り子の女性たちと

門で、カメルーンの都市社会や、都市と農村関係などを研究しています。最近では、沖縄の模合という庶民金融や祝儀文化の研究もしています。

池亀 ● 多様な研究者を抱えるASAFASですが、だからこそ「推しのポイント」といえるものはなんですか。

古澤 ● 教員も学生も多様で、専攻する地域を調べるにしても、ディシプリン(専門)を超えた視点で他分野の先生方の研究成果を取り入れ、自分なりにカスタマイズして、独自のテーマ設定ができることが魅力かな。

黒田 ● グローバル専攻には三つの講座がありますが、ゼミは一つ。院生室もおなじ。だから他の地域の情報も容易に交換できます。

平野 ● しかも、特定の地域と5年間一貫して向きあい、理解を深めることができます。

古澤 ● 5年のカリキュラムだから、修士課程を無理に2年で終わらせなくてもよい。

池亀 ● 自分のペースが許されるのは大きな利点ですね。長くフィールドにいて、3年目に予備論文を出してもよい。5年間の学び方は比較的自由に決められる。それに理系と文系とが同居する文理融合のバランスもよいですね。

そういうなかで、アジア・アフリカを研究する意義はなんですか。

これだけ多様なディシプリンの
研究者が集まっている
大学院はほかにない

平野 ● たとえば、日本は少子化が深刻ですが、アフリカは人口急増の課題を抱えています。そういうアジア、アフリカの国ぐには勢いがある反面、だからこそ課題がある。社会変動も大きい。おもしろい課題・テーマがいっぱい見つかります。

黒田 ● 変動する世界を、自分たちの国・地域の価値観で見てしまいがちですが、それぞれの地域ならではの背景、歴史がある。世界の問題を解決するには、現地のことを知らないといけない。やはりフィールドワークでの研究がだいじですね。

古澤 ● アジア・アフリカ地域の多くは熱帯地域。日本とは異なる世界では、異なる課



平野(野元)美佐

題が異なる自然環境のもとで起こっている。この違いを体験することは必要です。

池亀 ● グローバルな課題が顕在化しているアジア・アフリカを研究対象に、多様なディシプリン・専門性の研究者たちがこれだけ多く集まっている大学院は、ほかにないでしょうね。

古澤 ● フィールドワークでは、言葉もちがえば気温もちがう。匂いも空気感もすぐちがう世界を五感で体感しながら地域の人たちとどう一緒に暮らすのか。フィールドでは、自分で考え、意思決定し、研究上の課題を自分で乗り越えつつ研究調査を達成する。そこにやりがいを感じますね。それがフィールドワークの魅力。

黒田 ● フィールドを経験すると、人格すら変わるような気がしますね。私自身は大学院に入ってフィールドであるエジプトに行ったのが、人生初の海外でした。フィールドに行けるというのは、奨学金などの体制が整っているからこそ可能でした。

私はイスラームの政治思想を研究していますが、現地でない集まらない資料ばかりです。それに、思想というのは地域の人たちが育んできたものですから、どういう社会のどういう背景で生まれたのかを理解するには、書き手も含めて現地のいろんな人たちの話を聞くのがいちばんですね。

平野 ● どんなに文献を読んでも、フィールドではじめてその行間が読めることがあって、思ってもみない論理や考え方に驚くことがある。そのわくわく感が研究を深めるように思います。

長くフィールドに通っていると、現地の友だちも同じように歳をとってきます。暮らしている世界に距離があっても、この世界・時代を同時に生きている感じがしますね。

池亀 ● 院生で子どもがいるとか、子連れでフィールドワークするとか、ASAFASはそういうことを支援しようとしています。研究生活と自分の人生設計との関係はどうですか。

黒田 ● 私の在学中には、院生のところに結婚して子どものいる人は普通にいました。研究もプライベートも流れに任せて一緒にやる、そういう雰囲気の研究科だった気がします。

池亀 ● 私は他大学の理工学研究科にいましたが、30年前だと大学院に女性がいること自体がレアでした。

古澤 ● 私の学生も子連れで、ご家族で仕事を調整して、何か月か調査に行っていました。

池亀 ● 「それはやめなさい」というネガティブな圧力はASAFASにはありませんね。がんばっている人が身近にいるって、たのしい。

古澤 ● とにかくフィールドワークは、誰にとってもだいじ。日本にいても言葉を学び、文献から研究課題を探することはできますが、現



古澤拓郎



ソロモン諸島の環礁で海面上昇について話を聞く

地に出かけて人と環境に触れるなかでこそ研究課題が絞られる。学生から、現地に行ってみたら「こんなことを見つけてしまった」という報告があるたびに、「そんな面白い地域があるのか」って、こちらの好奇心も刺激されます。

現地でもまれ、
見違えるように成長する
学生たちがたのしい

黒田 ● 初めてのフィールドワーク、初めての海外は、やっぱりたいへん。でも、先輩がたくさんいるし、大学院生も多い。調査地が違ってもフィールド経験のある人からアドバイスをもらったりしながら徐々に慣れていきます。やはり生の情報は貴重。

古澤 ● 理系だと、研究室ごとに学生の調査地や調査テーマがすでに絞られている場合もあります。うちは逆に、どこでなにを研究するのか、学生には高い自由度がある。

平野 ● フィールドに行く前にテーマ設定をしようと学生に促しますが、行く前に考えたことと現地では違うこととは違うから、「研究テーマはフィールドで変えてもよい」と指導しています。

アフリカ専攻は、専攻全体で一つのゼミをやっていますから、学生が現場で見てきた生の情報を毎週のように聞けるのはとても貴重なことです。国による比較もできるよい環境です。いちど現場に行くと、学生は「現地ではこうだ」と自信をもって語るようになる。見違えるようになってたのしい。

池亀 ● 学生とはいえ、テーマを絞って、半年でも現地で調査をすれば、もうその分野のスペシャリスト、第一人者です。私たちが学ぶことは多いですね。(了)



南インドのマドゥライでインフォーマントたちと。左は名誉殺人のサバイバーで現在は反差別運動の活動家

ASAFASの学び

教育理念

アジア・アフリカ地域に対する深い理解と
国際的・学際的視野をもつ先導的な研究者および実務者の
養成をととして、地球、地域、人間の共生に向けて寄与します

詳細はこちら ▶ <https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/education/policies/>



学びの特徴と方針

Curriculum policy

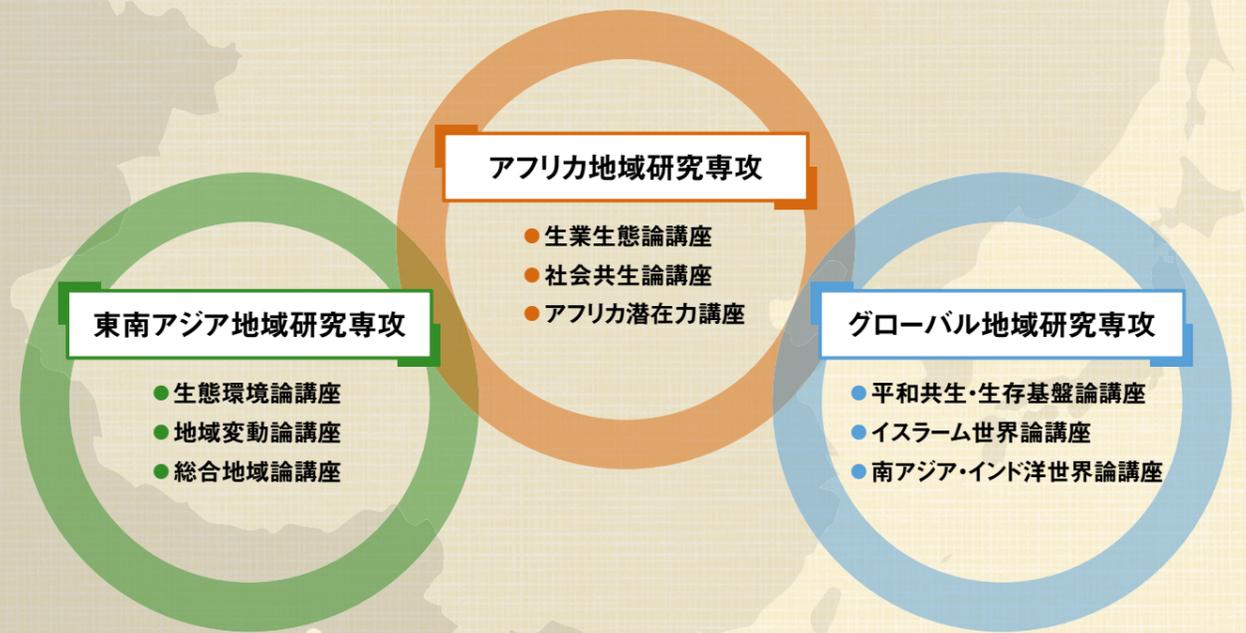
学生は講義と演習によって幅広い専門知識と研究技法を習得し、自身の研究課題を見出します。主体的な臨地実習と指導教員群による指導を通して、研究課題を解決する能力と論理的思考力、高い倫理性と強い責任感を身につけ、先進性や創造性、獨創性に富んだ博士論文の完成をめざします。

学位授与の方針

Diploma policy

5年一貫制博士課程のプログラムが定める科目を履修し、基準となる単位数(40単位以上)を修得し、研究指導を受けながら、博士予備論文および博士論文の審査・試験に合格することが、博士(地域研究)の学位授与の要件です。

3つの専攻——広範な視座と専門性の深化



ASAFASの魅力

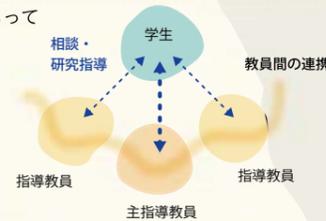
ディシプリンの枠を飛び出し、分野横断の地域研究に!

必修科目の「地域研究論」と「アジア・アフリカ地域研究演習」として、アジア・アフリカ地域研究に関する基礎的な問題を理解し、アプローチの方法も学びながら、学部教育で身につけた個別ディシプリンを活かしながら地域研究の方法を学びます。



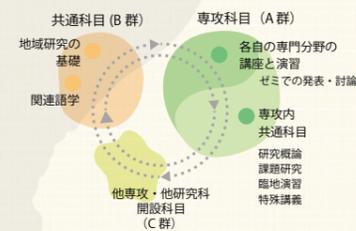
指導教員群制の採用

学生は自らの研究テーマに応じて3名の教員を指導教員として申告。そのうち1名が主指導教員となり、責任をもって研究指導にあたります。



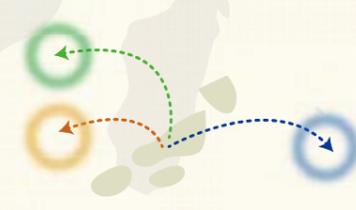
多彩な講義をととして、広範な専門的知識を習得

講義は専攻科目と共通科目で構成され、原則として半期の受講で必要単位を取得できます。1・2年次には各指導分野の講義と特殊講義、専攻内の関連科目を中心に履修。3年次以降には、他専攻の科目も受講できます。他域間比較を視野に入れた広範な専門知識を取得します。



フィールドワーク重視のカリキュラム

ASAFASは5年一貫制の博士課程。5年間じっくりと研究に集中できます。指導教員群との相互討論によって問題意識を明確にし、主体的なフィールドワークの成果をまとめて、研究指導の認定を受けます。こうした課題研究を積み上げながら原則2年次までに博士予備論文をまとめ、最終的に博士論文を作成します。



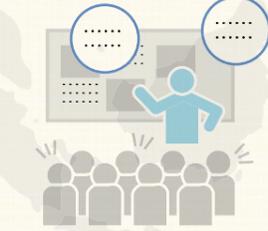
「研究演習」での徹底的な討議

研究指導分野の全教員が担当する研究演習に参加し、自らの調査・研究結果を練り上げ、独創的な博士論文に仕上げます。研究演習では、徹底的な相互討議をととして、学生の創造的発想を促し、自立した研究を進められるよう指導します。



「公開演習」での開かれた教育の試み

学生たちは、他分野・他部局の研究者、一般市民が参加する公開演習で研究成果を発表し、広く社会に開かれた地域研究の重要性を体得します。



活動資金獲得の支援体制

研究科内のエクスペローラープログラムをはじめ、学術振興会特別研究員制度や、民間企業・団体などの支援制度を活用して、海外への渡航費や現地活動費の個人負担を軽減できるようにサポートします。



教職員・学生ともに高い女性比率

ASAFASでは、女性も男性も安心して研究・教育活動ができるように「男女共同参画委員会」と「子育てフィールドワーカー・ワーキンググループ」が連携し、以下のようなことに取り組んでいます。そうした支援の成果もあり、ASAFASの女性比率は、**教員は31.8%、学生は59.7%**(2024年5月1日現在)にもおよび、いずれも京都大学ではトップクラスです。

「男女共同参画委員会」の主な取り組み

- 託児支援(託児・授乳スペースの確保)
- おむつ替えのできるトイレの整備
- 子連れで仕事ができる「子育て交流室」の設置
- 教育・研究活動と育児・介護の両立のための環境整備
- 子育て・介護と研究の両立に関する相談体制の充実 など



研究・教育活動を支える関連機関

- 京都大学アフリカ地域研究資料センター
- 京都大学東南アジア地域研究研究所
- 京都大学フィールドステーション



ASAFAS 附属センター ほか

- 次世代型アジア・アフリカ教育研究センター
- イスラーム地域研究センター
- 環インド洋研究センター
- ハダリー・イスラーム文明研究センター
- ケナン・リファーイー・スーフイズム研究センター
- 臨地教育・国際連携支援室
- キャリア・ディベロップメント室
- 男女共同参画委員会

東南アジア地域研究専攻



<https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/education/asia/>

東南アジアとアフリカはともに、①強靱な熱帯生態のもとで自生的な歴史を展開してきたという共通性があります。とくに東南アジアでは、②国家を単位とする経済発展や社会変容が加速し、他方で国家を越えた地域統合が進展しつつあります。また、③急激な経済発展と運動しながら、生態・社会・文化が相関して新たな状況を生み出すという、多角的な展開を遂げつつあります。このような地域特性と課題に対応し、3つの研究指導分野を置いています。

生態環境論講座

東南アジアの基盤をなす自然と人間活動の相互作用により形成される生態環境を、**自然生態と社会生態**の二つの分野から総合的に考究。陸域と水域の自然環境、公衆衛生、農林水産業、人間と動植物の関係などを、**人間の生存や開発との関連**において明らかにするとともに、生活世界を形成する価値意識・社会組織などを、生態環境との関連において分析する。

▶ key word...

- **自然生態論 I・II**
自然環境の改変／農業の近代化／農村の過疎化／グローバルな企業活動／日本との比較／人類の変化と適応／環境と健康
- **社会生態論 I・II**
行動生態学／動物の進化／熱帯生物資源の利用・管理・保全
- **人間生態学**
ヒマラヤ地域の事例研究／生態が健康に及ぼす影響
- **生態環境論研究演習 I～IV**
東南アジアの自然環境と、それをとりまく社会生態環境の特質を検討するための基礎的な問題とアプローチの方法に関する演習



生態環境論研究演習のようす

地域変動論講座

植民地支配、ナショナリズム、開発、グローバル化、民主化などによって、この一世紀ほどのあいだに東南アジアに生じし、現代も**進行しつつある変容の諸相**を総合的に研究。時代的には近現代、地域的には東南アジアを中心としながらも、必要ならばより長い時間軸と広い空間軸で地域の変容を考える。

▶ key word...

- **地域歴史論**
日本の東南アジア地域支配と直接的・間接的被害／東南アジア各国と日本の関係の変遷
- **宗教社会論**
東南アジア社会の宗教と世界観／東南アジア宗教論の基本語彙と重要論点
- **地域相関論 I・II**
インドネシア政治変容(時代、他国比較)／国政・地方政治／人類学的理論と文化理論
- **宗教史論**
東南アジア島嶼部／イスラームの歴史的展開／外部のイスラーム世界との関係
- **地域変動論研究演習 I～IV**
東南アジア地域の発展と変動の諸側面ならびに方向性をマクロ・ミクロの両視点から総合的に考察するための基礎的な問題とアプローチの方法に関する演習



ベトナム・トゥエンクアン省の民族村でタイ人の道士と資料参照

総合地域論講座

東南アジア社会の特質を、生態・人間環境分野、歴史・文化・社会分野、および政治・経済分野のいずれかを軸にしつつ、**分野横断的に考察**。一方で、農林漁村や都市、世帯から、地域、地方、国家、さらに越境し、**グローバルな重層的視点**で、生活空間や生産現場でのフィールドワーク等に基づいて、東南アジア社会や地域の抱える諸問題や個性、持続性を、**実証的に考察して新たな知見**を得る。

▶ key word...

- **東南アジア史論**
東南アジア史のヒストリオグラフィー
- **東南アジアの農業・農村**
東南アジアの自然のメカニズムと変化
- **水循環・風土論**
人間活動と水循環の相互作用
- **東南アジア経済論 I・II**
東南アジア経済の諸特徴と構造／産業発展論
- **比較農村社会論** ■ **紛争と平和**
- **東南アジアのイスラームの歴史**
- **研究プロジェクトデザイン**
- **総合地球論研究演習 I～IV**
東南アジアの生態文化複合系の動態、社会・文化・政治・経済にまたがる動態とその相関、地域固有の論理や析出展開論理に関する演習



東南アジアの初期イスラム教徒の葬祭モニュメントについての議論

専攻内 共通科目

■ 東南アジア論課題研究 I～III

博士予備論文および博士論文の基礎となる学生の研究内容について討議し、①フィールドワークの視点と方法を練り上げ、②学際化と研究内容の深化をはかり、③総合化・深化させるための演習

■ アジア地域相関論特殊講義

チベットとブータンの歴史、社会、文化、宗教の概観、ブータンを含むチベット文化圏についての多角的な理解

■ アジア臨地演習 I～III

①生態・社会・文化に根ざした地域の固有化を理解し、②地域が直面する現代的諸問題を研究課題として発見するためのフィールドワークの手法を習得し、③フィールドワークの過程で発見した研究課題について、国際機関やNGO、研究機関等で研究発表や討論するとともに、必要に応じて実践活動にも取り組む

活動のフィールド(一部)



▲ 現地の活動拠点

- 1 カンボジア・フィールドステーション(王立農業大学)
- 2 インドネシア・マカッサル・フィールドステーション(ハサスディン大学)
- 3 バンコク連絡事務所(CSEAS)
- 4 ジャカルタ連絡事務所(CSEAS)

▶ 教員・院生の調査地(一例)

- 5 インドネシア:スマトラ島アチェ州
- 6 インドネシア:スラウェシ島
- 7 マレーシア:ペナン州
- 8 ブルネイ:トゥトン地区
- 9 フィリピン:ミンダナオ島
- 10 ベトナム:トゥエンクアン省ナーハン県
- 11 タイ:北部ムン川下流域
- 12 タイ:チェンライ県

■ 協力機関、学術交流協定校など(一例)

- 13 カンボジア: 王立ブノンベン大学、王立芸術大学
- 14 インドネシア: インドネシア大学
- 15 ラオス: ラオス国立大学
- 16 タイ: メーファールアン大学

わたしたち、こんなことをしています!

講座の仲間と知的探求の日々



生態環境論講座
小坂康之 准教授

生態環境論講座ゼミには、教員・研究員約10名と大学院生約20名が参加。長期フィールドワークにもとづく研究発表に対して、メンバー全員で自由に討論することで、研究内容の深化と発表技術の向上をめざしている。月に1回の専攻内3講座合同のゼミでは、専門分野を越えた広い視野で東南アジアについて学んでいる。私は農学や植物学をバックグラウンドにしつつ、動物行動学や公衆衛生学などの学生や研究者とも積極的に意見を交換している。



地域変動論講座
伊藤正子 教授

1990年代前半、ベトナムはやっと国を開いたが、北部山間部で調査した西側外国人はまだ誰もいなかった。書籍でしか知らなかった少数民族地域に入り、戦争がつづいた激動の20世紀を中越国境地帯で生きてきた人びとに直接に話を聞き、歴史の目撃者になれた気がした。国境を跨いで広がる「民族の世界」も体感。あれから30年。両国関係は変容し、もはや外国人が北部国境地帯をうろつくことはできない。あの時代に留学できた幸せを思う。



総合地域論講座
R・マイケル・フィーナー 教授

講義では東南アジアにおけるイスラームの歴史を担当。そこではスルタンの出現、住民の改宗、多様な文化表現の発展、ヨーロッパ帝国主義の影響などの研究を通して、東南アジアのイスラーム化とバナキュラー化を探究。院生たちとともに海域アジア遺産調査(MAHS)による遺跡や歴史的建造物のデジタル一次資料も含めて多様な資料に触れ、それらを深く理解するため、考古学、人類学、言語学、比較文学、美術史、社会学、宗教学などを幅広く取り入れている。

▶ 近年の学位論文の一例 (学位授与年度、講座)

- インドネシアにおける泥炭保全ガバナンスの展開と課題 ——リアウ州R村における経済的機会の偏向に着目して (2023、地域変動論講座)
- 多宗教・多民族社会における「共棲」の政治 ——南部フィリピンの日常生活、エリート支配、和平プロセス (2023、地域変動論講座)
- 現代ジャカルタにおける分断と秩序 ——路地バリアの普及に関する実証的研究 (2023、地域変動論講座)
- From OVOP to OTOP and Beyond: Ethnography of the One Product Policy (2022、地域変動論講座)
- Cutch Production and Sustainability of Acacia Catechu Forest Management in Myanmar (2022、生態環境論講座)
- Creation of Modern Northern Thai Chronicles and Politics of Historiography (2021、総合地域論講座)
- インドネシア・バンガイ諸島サマ人の漁撈における環境認識 (2021、生態環境論講座)
- Hydropower and Socio-economic Development in Laos (2021、総合地域論講座)
- The Evolution in Ownership and Business Practices in Thai Commercial Banking Sector since 2000s (2020、総合地域論講座)
- タイ国チャオプラヤー河最下流部における外来カワズメ科魚類の導入に伴う生態系および魚類資源利用の変容に関する研究 (2019、生態環境論講座)
- Ecological Studies on Locally-managed Mangrove Forests in Taninthayir Region, Myanmar (2019、生態環境論講座)



東南アジア地域研究専攻の学生の研究課題一覧
<https://www.asia.asafas.kyoto-u.ac.jp/students>



参考 科目配当表とシラバス
<https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/education/syllabus/>

アフリカ地域研究専攻



<https://www.africa.asafas.kyoto-u.ac.jp/>

アフリカ大陸は、①多様な生態系のもとで、伝統に基づいた独自の社会・文化を育み、自然と人間の共存関係を築いてきましたが、今日の生活のありようや基盤となる生態資源利用のあり方は、グローバル市場経済や環境問題と無関係ではありません。また、②多様な民族が共生するアフリカは、植民地支配を経て20世紀中葉以降に本格化した国民国家としての再編プロセスにおいて、民族単位での分節化が潜在し、国家や社会の統合の基盤が脆弱です。さらには、③独立後のアフリカ諸国が開発政策や紛争処理、環境問題などに取り組むさいには、「世界標準」の考え方を押しつけられることが多く、アフリカ本来の潜在力に根ざした内発的発展の道を探ることが課題となっています。このような地域特性と課題に対応し、3つの研究指導分野を置いています。

生業生態論講座

農耕や牧畜、狩猟、採集、漁撈、商業、製造業などの生業の構造と機能、およびその自然的基盤を学際的に分析。それらの生業と、より広い世界の政治・経済・社会的な動きとの関係に着目し、生計戦略や地域経済の特質を評価しつつ、現代アフリカにおける人間と自然の関係のあり方を探究する。

▶ key word...

- 農業生態論
アフリカ農業の現状／食料-経済-エネルギーの複層的な関係性／持続可能な地域発展
- アフリカ環境学
アフリカの自然・社会環境の変化(人口増加、都市化、資源開発、外資系企業、気候変動、自然資源利用、選挙や法律の改変、土地制度)へのアプローチ手法
- 生態史論
人間と生態系との関係(史)／生物多様性保全／持続的地域開発
- 地域生態論
地理的条件と歴史的経緯／地域固有の生態系／生物や人びとの生き様の生態学的理解



農村における有用植物の精油抽出(マダガスカル)

社会共生論講座

アフリカに暮らす人びとが長い歴史をとおりて培った多様な文化的実践とその特性を、言語的・非言語的アプローチ双方を活用するフィールドワークによって把握。その知見をもとに、現代の複合社会における多民族共存や地域文化形成のメカニズムと、それを支えている自然的、歴史的、社会的な基盤を解明し、アフリカにおける多元共生的な社会のあり方を探究する。

▶ key word...

- アフリカ都市社会学
都市=農村関係／植民地支配／グローバリゼーション／都市社会の動態
- 相互行為論
現代アフリカ社会の自然的・社会的な資源利用／相互行為を組織化する仕組み／経験的・理論的な議論
- 生業とものづくり
エチオピアでの生業活動(土器製作、農業、土産物製作)／ヒトと「もの」の関係／外部者としてかかわる調査者の可能性



市場での土器のやりとり(エチオピア)

アフリカ潜在力講座

アフリカが今日直面している種々の問題を歴史的経緯と社会的動態のなかで同定し、アフリカ社会が外部世界との折衝・交渉を通して創造し実践・運用・生成してきた問題解決のための動的な力を「アフリカ潜在力」として評価します。この概念を基盤として、現代世界の困難を克服し、人類の未来を展望するためのアフリカ発の知の様式と実践的な方策を探究します。

▶ key word...

- 在来知と内発的発展
文化的資源としての在来知／人びとの集まり(新たなコミュニティ)の分析／農村、教育、博物館、生物多様性、ものづくり、定期市
- アフリカ開発論
国家との接触の増加／市場の浸透／共同体の変質／開発現象の内容、背景、影響／住民の主体性
- 野生動物保全論
固有の歴史と動物観／グローバルとローカルが交差する現代の問題として・動物保全論
- 水・衛生論
サハラ以南アフリカのWASHの現状／物質循環と健康・環境影響／人・環境・社会の相互作用



リスク可視化ワークショップ後の参加者との写真 (ザンビア)

専攻内 共通科目

- 熱帯病学 感染症、疾病の知識と感染予防対策
- 実践的開発協力論 開発援助事業の受益者・現地行政官・開発ワーカーの現状。開発ワーカーの思考、行動、役割、能力などを議論
- アフリカ政治論 アフリカ圏域の政治的事象の類似性を「手がかり」にアフリカ政治への基礎的な理解を深める
- 牧畜文化論 人間と非人間による場所の構成
- GIS分析実習 フィールドデータや衛星画像データの分析
- フィールド統計学 フィールド研究者が利用する統計学
- イノベティブ・アフリカとSDGs 持続可能な開発の実現に必要な、技術的・社会的イノベーションの推進のあり方、コミュニティにおける在来知の形成について学ぶ

- アフリカ地域研究演習I~IV アフリカ地域研究にかかわる①基礎的な問題の理解、②研究課題の構築、③総合的な問題把、④先端的な問題の把握と博士論文についての相互討論
- アフリカ臨地演習I~III ①生態・社会・文化に根ざした地域の固有性を理解し、②研究フィールドワーク手法を習得し、③フィールドワークで発見した具体的な研究課題を国際機関やNGO、研究機関等において研究発表、討論する

活動のフィールド



ガーナのケンテ布職人

女性たちの世間話(モザンビーク)

▲ 現地の活動拠点

- 1 アフリカオフィス(エチオピア)
- 2 エチオピア・フィールドステーション
- 3 カメルーン・フィールドステーション
- 4 ナイロビ・フィールドステーション(ケニア)
- 5 ザンビア・フィールドステーション
- 6 ナミビア・フィールドステーション
- 7 ニジェール・フィールドステーション
- 8 マダガスカル・フィールドステーション

▶ 教員・院生の調査地(一例)

現在、アフリカ54か国中30か国以上で、教員・院生が調査中です。

【主な調査国】エチオピア/ウガンダ/ガーナ/カメルーン/ギニア/ケニア/コンゴ共和国/ザンビア/ジブチ/セネガル/タンザニア/ナミビア/ニジェール/ブルキナファソ/マダガスカル/南アフリカ/モザンビーク

▶ 協力機関、大学など

京都大学アフリカ地域研究資料センターと連携し、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、アジアの16か国、24機関の大学・研究機関と学術交流協定を結び、各国の研究者との交流をすすめて、研究活動の促進に努めています。

【アフリカの主な提携校】
ウガンダ:マケレレ大学
エチオピア:アジスアベバ大学
カメルーン:ヤウンデ第1大学
ケニア:ナイロビ大学
ザンビア:ザンビア大学
セネガル:シェーク・アンタ・ジョブ大学
タンザニア:ソコイネ農業大学
マダガスカル:アンタナナリヴ大学



森林火災の跡地での調査(マダガスカル)

チャイロキツネザル(マダガスカル)

わたしたち、こんなことをしています!



生業生態論講座
佐藤宏樹 准教授

マダガスカル固有のランを宿す聖なる木とともに



社会共生論講座
金子守恵 准教授

コミュニティ博物館で地方行政官に実践的地域研究のとりくみを説明



アフリカ潜在力講座
原田英典 准教授

自ら採取した水・環境試料を簡易検査をする地域の人々

私たちは20年以上にわたり、マダガスカルの熱帯林で動植物の生態を研究している。その森が2021年の火災で失われた。地域社会に深く関わるフィールドワーカーはその現状に対し、森林火災がもたらすさまざまな課題に学際的にアプローチする。被災から4年を経た現在、ASAFASの院生や国内外の研究者とともに、森林では生態学や民族生物学、火災跡地では土壌学や水文学、農村周辺では農学や環境社会学の調査を展開し、人と自然の共生を探究する地域研究を実践している。

現代アフリカにおける生業活動を主な対象にして研究にとりくむ。講義では、エチオピアにおいて日用品や農産物を製作・加工する人びとが、素材を入手し、それを製作・加工、販売するまでの「ものづくりの過程」を検討する。素材の性質やものの形態がヒトの行動に作用する点も考慮し、地域研究におけるヒト-モノ関係を論じる。くわえて、講師が取り組んできた参加型生計道路補修やコミュニティ博物館での活動を、実践的地域研究の見方につれて議論している。

ザンビア・ルサカの未計画居住区は水・衛生の状況が悪く、コレラのアウトブレイクが散発。私たちはJICAの事業として、現地大学や地域の自治組織、ユース団体、公衆衛生局などと協力し、地域の人びとが「目に見えない汚染やリスク」を自ら可視化することで、水・衛生の重要性を「教える」のではなく「実感」し、リスクに基づく改善策を自らデザインする仕組みづくりをめざしている。

▶ 近年の学位論文の一例 (学位授与年度、講座)

- キゴマ州に生きる青少年の語り——ゆくタンザニア教育制度の活用と離脱 (2024, 社会共生論講座)
- モザンビーク村落部の変りゆく水源と水利用——ニアッサ州の手押しポンプ導入村を事例として (2024, アフリカ潜在力講座)
- 職業訓練学校での修学が所得と雇用にもたらす影響——ケニア・ナイロビの学生・労働者を事例として (2024, アフリカ潜在力講座)
- ウガンダ都市部におけるバイクタクシー運転手の自主組織と顧客獲得実践 (2024, 生業生態論講座)
- カメルーン東南部熱帯雨林における食肉類の保全生態学的研究 (2024, 生業生態論講座)
- カメルーンにおけるイスラーム関連書物の利用 (2023, 社会共生論講座)
- Rural Road Accessibility and the Change of Enset Agriculture in Aari Zone, Ethiopia (2023, 社会共生論講座)
- ケニア・ナクル県における契約農業グループの変容 (2023, アフリカ潜在力講座)
- Participatory Forest Management for Sustainable Development in Southeast Cameroon (2023, 生業生態論講座)
- 愛着と養育—カメルーン東南部の狩猟採集民バカの乳幼児と養育者の相互行為の民族誌 (2023, 生業生態論講座)
- サヘルの都市とゴミを運ぶ人びとの生活誌——ニジェール・ニアメ市の廃棄物行政と出稼ぎ民による家庭ゴミ収集 (2023, 生業生態論講座)



アフリカ地域研究専攻の学生の研究課題一覧
<https://www.africa.asafas.kyoto-u.ac.jp/researcher/>



参考 科目担当表とシラバス
<https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/education/syllabus/>

グローバル地域研究専攻



<https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/education/global/>

アジア・アフリカ地域は、近年の急速なグローバル化のもとに大きく変容し、さまざまな課題（環境問題、持続的発展、貧困問題、地域紛争など）を抱えています。この専攻では、そうした国際社会のさまざまな課題に関する研究と解決策に貢献しうる地域研究をめざします。とくに、グローバルな展開をしてきた広域的な地域、すなわちイスラーム世界、南アジア・インド洋世界を主な対象としながらも、それらを越えたアジア、アフリカの地域間比較、超域的な研究を重視します。このような対象地域と課題をふまえ、次の3つの研究指導分野を置いています。

平和共生・生存基盤論講座

アジア・アフリカの地域社会に生きる人びとにとって、平和的に共生し、自らの生存基盤を確保することはどうか。この視点は地域研究の中心的なテーマでありつづけるが、グローバル化の進行にともない、その様相はますます複雑化している。本講座では、紛争・戦争の問題や、それがもたらす環境負荷も含めて、**平和的な共生を実現し持続的な生存基盤**を発展させる可能性について、総合的な視点から研究する。

▶ key word...

- **平和共生論の基礎**
政治学の各地への適用可能性（紛争形態／国家形成／ナショナリズム／政治体制／民主主義）
- **中東の平和と戦争**
紛争解決、和平プロセス／難民の起源と現状
- **持続型生存基盤研究の方法**
自然科学（農学・生態学・情報学）の基礎知識
- **持続型生存基盤と環境**
環境史／政治環境論／環境論／気候変動論
- **熱帯乾燥域生存基盤論**
中東・北アフリカ地域の生存基盤持続型システム
- **現代中東・北アフリカ地域論**
中東・北アフリカ地域の変容と地域システムの展開
- **地域研究・文理融合論**
南アジア、東南アジアの農業・農村変容の把握と分析
- **難民研究**
難民問題の多様なアクター間の関係性



イスタンブールのグランドバザール

イスラーム世界論講座

イスラーム世界を構成する**一体性と多様性**ならびにイスラーム世界に帰属する諸地域、とくに中東、北アフリカ、中央アジア、東南アジアなどについて、思想・歴史・現代社会を総合的に研究する。また、それらの**地域間比較**、国際関係における「**メタ地域**」としての**イスラーム世界**、西欧や北米におけるイスラームなど、イスラーム世界の全域あるいは複数地域間にわたるさまざまな諸問題を対象とする。

▶ key word...

- **イスラーム世界論研究Ⅰ・Ⅱ**
基礎の習得と基本問題の表現・発信能力の習得
- **スーフィズム・タリーカ論Ⅰ～Ⅳ**
スーフィズム、タリーカ、聖者信仰に関する資料講読
- **イスラーム社会経済論Ⅰ**
イスラーム法の基本構造／イスラーム金融の歴史
- **アラビア語原典講読Ⅰ～Ⅲ**
現代イスラーム世界の政治、経済、法、社会
- **中央アジア地域研究論**
旧ソ連中央アジアの近現代史、ロシア・ソ連文化
- **オスマン朝スーフィズム論Ⅰ・Ⅱ**
オスマン朝の思想書／スーフィズム文献の講読
- **アジア・アフリカ・スーフィズム論**
スーフィズムの諸相（思想研究・歴史研究・人類学）
- **イスラーム世界論特殊講義**
イスラームと現代イスラーム社会／現代イスラーム社会の諸問題に対するムスリムの認識と解決策



女性のライフストーリーを聞く（ウズベキスタンのサマルカンド市にて）

南アジア・インド洋世界論講座

南アジア地域そのものと、**環インド洋ネットワーク**のなかで相互に深い関係をもつ南アジア、東南アジア、中東、東アフリカ、さらには東アジアにも及ぶ諸地域を、**インド洋世界として広域的に研究**。南アジア地域の固有の諸問題を扱うとともに、南アジアを軸としてインド洋を媒介とする全域あるいは複数地域間にわたる多様な諸問題を対象とする。

▶ key word...

- **南アジア地域論Ⅰ・Ⅱ**
社会学・人類学の学説史の理解／南アジア地域研究の論点整理と社会学・人類学研究の枠組み
- **南アジア文化論**
南アジア地域および他地域の文化理論の比較と相関
- **南アジア政治論**
印パ分離独立の過程／宗教ナショナリズムの台頭
- **インド洋世界論**
19世紀イギリス人外交官の旅行報告の解読
- **ヒマラヤ地域論**
ヒマラヤ地域研究の論点と研究の枠組みの議論
- **南アジア・イスラーム論**
ムスリムの動態／イスラーム世界全体への影響力
- **アジア市民社会論**
市民社会概念の歴史的系譜／グローバル市民社会論
- **南アジアの環境と文化**
南アジアの現代的諸問題と自然環境／ケガレと神霊
- **ネパール語原典講読Ⅰ・Ⅱ**



南インド・カルナータカ州の牛の市

専攻内 共通科目

■ グローバル地域研究演習Ⅰ～Ⅳ

①グローカリゼーションと地域の固有性の相関性、アジア・アフリカの持続型生存基盤、イスラーム世界および南アジア・インド洋世界の特質を明らかにし、②基礎的な問題群を理解し、研究課題を構築。③総合的な問題把握と演習を積み重ねる。

■ グローバル地域研究論課題研究Ⅰ～Ⅲ

博士予備論文の基礎となる個別課題について討議し、①フィールドワークの視点と方法を練り上げ、②学際化と研究内容の深化を図る。③博士論文の作成に向けて討議を重ねる。

■ グローバル臨地演習Ⅰ～Ⅲ

生態・社会・文化に根ざした地域の固有性を理解し、①地域が直面する現代的諸問題を発見し、②フィールドワーク手法を習得。③フィールドワークで発見された具体的な研究課題について、国際機関やNGO、研究機関等において研究発表や討論を重ねる。

活動のフィールド



ハリーサの丘から望む海岸線（レバノン） イスファハーン（イラン）

ラリトプル郡グシェル村（ネパール）

▶ 教員・院生の調査地（一例）

- | | |
|------------|-----------|
| 1 エジプト | 11 ベトナム |
| 2 アラブ首長国連邦 | 12 インドネシア |
| 3 シリア | 13 マレーシア |
| 4 イラン | |
| 5 ウズベキスタン | |
| 6 パキスタン | |
| 7 ネパール | |
| 8 ブータン | |
| 9 インド | |
| 10 スリランカ | |



マレーシアの日常的な寄付文化

▶ 協力機関、大学など（一例）

- | |
|---|
| 14 トルコ：ウスキュダル大学附属スーフィズム研究所 |
| 15 マレーシア国民大学 経済経営学部 |
| 16 スリランカ：ペラデニア大学 |
| 17 ネパール：トリブバン大学 |
| 18 パキスタン：パンジャブ大学 |
| 19 インド：開発研究センター（Centre for Development Studies） |
| 20 ヨルダン大学戦略研究センター |

わたしたち、こんなことをしています！

エジプトでの新しいイスラーム型チャリティ実践の調査



平和共生・生存基盤講座 長岡慎介 教授

「イスラーム経済」という不思議な響きをもつ新しい経済実践に注目している。イスラーム経済は資本主義の抱える多様な問題（格差、貧困、環境問題など）を克服するためのオルタナティブを、イスラームの理念にもとづいて打ち立てるべく登場した新しい実践で、イスラーム教徒だけでなく、私たちが含めた地球社会のよりよい未来を創り出すための「知恵」がたくさん隠されていて、その懐の深さに大きな可能性を感じている。



見送りにきた息子と



イスラーム世界論講座 帯谷知可 教授

息子が3歳になる年から、ほぼ毎年、彼を連れてウズベキスタンで調査を重ねてきた。イスラーム・ヴェールに関する記憶について聞き取り調査をしたときには、訪問先のご家族が子連れを温かく迎え入れてくれて、1人なら入れなかったであろう家の奥まで見せてもらったことも。あるとき、私の姿が見えず不安になった息子が泣き止まず、みなを困らせていたところ、年上のお兄ちゃんと仲良くなり、以来、私抜きでも過ごせるようになるなど、私の研究の歴史は、息子の成長とも深く関わっている。

娘はネパールの子どもたちとすぐに仲よしく



南アジア・インド洋世界論講座 藤倉達郎 教授

初めてネパールの地を踏んだのは法学部生時代、「学生ワークキャンプ」のメンバーとして。電気も水道もない山の中で水牛を飼い、トウモロコンを育て、朝から晩まで力仕事をしている村人たちが、右も左もわからぬぼくたちに、ひたすら明るく親切に接してくれたことに感動。以来、専攻を文化人類学に変え、ネパールに通いつづけている。娘を連れて4回ほど渡航したが、ネパールの人たちは、老若男女を問わず、小さな子どもにとっても優しい。



調査に同行した娘（当時7才）

▶ 近年の学位論文の一例（学位授与年度、講座）

- 13～14世紀ダマスカスのハンバル学派におけるスーフィズムの伝統と展開（2024、イスラーム世界論講座）
- 生き方としてのバルダ——現代パキスタンにおける女性たちの経験（2024、南アジア・インド洋世界論講座）
- ラオス北部における中国バナナ企業家の適応動態（2024、平和共生・生存基盤論講座）
- 15～16世紀モロッコのスーフィーによる社会改革——タリーカ・ジャズーリーヤを中心に（2023、イスラーム世界論講座）
- 近代南アジアにおけるスーフィー伝統の継承と改革——アシュラフ・アリー・ターナヴィーの存在一性論に見るイブン・アラビー学派の潮流（2023、イスラーム世界論講座）
- 西ブータン社会におけるシングル女性に関する人類学的研究——女性の宗教実践とライフコース選択に着目して（2023、南アジア・インド洋世界論講座）
- 北・西アフリカにおけるイブン・アラビーの言説的伝統——思想的源泉としてのムハンマドに焦点を当てて（2023、イスラーム世界論講座）
- 現代インド・ムンバイの革製品産業——スラム工房ネットワークを通じたイノベーション（2022、南アジア・インド洋世界論講座）
- 感情経験と布の価値——東ネパールにおけるダカ織りの民族誌（2022、南アジア・インド洋世界論講座）



グローバル地域研究専攻の学生の研究課題一覧はこちら
<https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/research/themes/#senkou03>



参考 科目担当表とシラバス
<https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/education/syllabus/>

教員紹介

東南アジア 地域研究 専攻

詳細はこちら
<https://www.asia.asafas.kyoto-u.ac.jp/members>



- 生態環境論講座
- 地域変動論講座
- 総合地域論講座



海上家屋(フィリピン、ダバオ)



ヤシ樹園地(インドネシア、東ヌサ・トゥンガラ州)



野党支持者のデモ(タイ、バンコク)

アイコンの凡例

- | | | | | |
|-------------------|----|-------|----|------------------|
| ジェンダー/
セクシャリティ | 動物 | 社会 | 資源 | 言語/
コミュニケーション |
| 宗教/思想 | 植物 | 歴史 | 貧困 | 移民 |
| ものづくり・
生業 | 経済 | 都市 | 開発 | 暴力・紛争 |
| 芸術・芸能・
アート | 文化 | 農村 | 健康 | |
| 食 | 政治 | 環境・生態 | 農業 | |

小坂 康之 Yasuyuki KOSAKA
 kosaka.yasuyuki.8c@kyoto-u.ac.jp

東南アジアにおける自然環境の改変、農業の近代化、農村の過疎化などの現象を、人と植物の関係を指標に研究してきた。特にラオスの二次林や農地の植生、小農の生産様式、野生植物利用に関心がある。



中村 亮介 Ryosuke NAKAMURA
 nakamura.ryosuke.7x@kyoto-u.ac.jp

アジアを中心に、主に熱帯地域で植物-土壌間の相互作用機構の解明に取り組んでいる。近年は、熱帯林の長期保全や資源利用、人為的なかく乱が生態系機能におよぼす影響、植物と人の営みの関係にも興味がある。



山口 元樹 Motoki YAMAGUCHI
 yamaguchi.motoki.7n@kyoto-u.ac.jp

オランダ植民地期から独立直後までの時期を対象にインドネシアのイスラム運動を研究している。移住・巡礼・留学といったヒトの移動や新聞・雑誌の流通を媒介とした中東アラブ地域との思想的な交流に関心がある。



三重野 文晴 Fumiharu MIENO
 mieno-lab@cseas.kyoto-u.ac.jp

専門分野は途上国の金融システムの形成発展、タイ、ミャンマー、ラオスあるいは東南アジア全般の経済、タイ数量経済史。マクロ分析からミクロ分析、歴史から政策、フィールド調査から統計データまで、さまざまなアプローチで研究に取り組んでいる。



甲山 治 Osamu KOZAN
 kozan@cseas.kyoto-u.ac.jp

東南アジアに広く存在した熱帯泥炭湿地林は、1990年代以降アカシアやアブラヤシの大規模な植栽を目的とする排水により乾燥化と荒廃化が進んだ。地域住民と協力し、再湿地化した泥炭地での農林業を実践し、泥炭地の防災と回復に取り組んでいる。



木下 こづえ Kodzue KINOSHITA
 kinoshita.kodzue.8v@kyoto-u.ac.jp

動物は生息環境に適応した繁殖形態を進化させてきた。人間活動などで生息環境が変化すると、彼らの繁殖にどのような影響が及ぶのか？主に希少なネコ科動物を対象として、内分泌学や行動学などの視点から研究している。



伊藤 正子 Masako ITO
 ito.masako.8e@kyoto-u.ac.jp

ベトナム現代史が専門で、少数民族と国家の関係の歴史の変遷に関心がある。現在は、居住国と対立する国家に源をもつ人々として華人を例に、国家関係に翻弄されつつあれがどのように生きてきたかを検討している。



師田 史子 Fumiko MOROTA
 morota.fumiko.8p@kyoto-u.ac.jp

人はなぜ賭けるのか。主にフィリピンにおける賭博実践を文化人類学的に調査している。「賭け」から見出そうとしているのは、偶然性に対する人びとの身構え、テクノロジーとアディクション、賭博産業と国家の関係性など。



R・マイケル・フィーナー R. Michael FEENER
 feener@cseas.kyoto-u.ac.jp

東南アジアとインド洋海域世界のクロス・リージョナル研究が専門。近年は海域アジア遺産調査プロジェクトのディレクターとして、インドネシア、タイ、モルディブの歴史を研究してきた。食やエネルギーを通して地域の未来を考えることにも関心がある。



中西 嘉宏 Yoshihiro NAKANISHI
 nakayosi@cseas.kyoto-u.ac.jp

ミャンマーを中心に東南アジアの政治や外交を研究している。各地の国家権力や社会秩序の〈クセ〉に関心がある。政治なんて小難しそうだが、所詮は個性ある個人の行為が集まったもの。真剣だったり、悪辣だったり、抜けていたりとおもしろい。



竹田 晋也 Shinya TAKEDA
 takeda.shinya.4s@kyoto-u.jp

東南アジア大陸部(ミャンマー・ラオス・タイ)を中心に、焼畑アグロフォレストリーや非木材林産物生産について研究してきた。経済成長がつづくASEAN諸国での脱農業化と森林転換の実態にも関心がある。



山崎 渉 Wataru YAMAZAKI
 yamazaki@cseas.kyoto-u.ac.jp

日本で開発した検査技術を海外(インドネシア、フィリピン、ベトナム、タンザニア等)での調査に利用し、病原体(細菌・ウイルス・原虫・寄生虫)の生態を研究。ヒトと動物の、あるいは両者を越境する病原体が研究対象。



片岡 樹 Tatsuki KATAOKA
 kataoka.tatsuki.5u@kyoto-u.ac.jp

研究関心の一つは東南アジア大陸部山地における民族間関係と宗教について、もう一つは東南アジア都市部における中国系宗教についてである。いずれもタイ国を中心にその隣接諸国をも視野に含めた研究を行っている。



石川 登 Noboru ISHIKAWA
 ishikawa@cseas.kyoto-u.ac.jp

臨地調査によってのみ知ることでできる人びとの営みとこれを取りまくマクロな構造や歴史に注意を払いながら、マレーシア領ボルネオで国家国民の生成、エスノジェネシス、山地-平地関係、プランテーション、イスラム化などを考察している。



小林 知 Satoru KOBAYASHI
 kobayashi.satoru.3n@kyoto-u.ac.jp

文化人類学を手法とした地域研究の立場から、カンボジアの農村社会における生業の転換や、東南アジア大陸部の上座仏教徒社会の変化を研究してきた。食やエネルギーを通して地域の未来を考えることにも関心がある。



柳澤 雅之 Masayuki YANAGISAWA
 masa@cseas.kyoto-u.ac.jp

定点調査と広域調査を往還した調査を実施している。定点調査はベトナム紅河デルタのひとつの村落を対象とし、1994年以降の長期の村落変容を調査。広域調査は東南アジア全体を対象とし、各地の人と自然の関係の変容を調査している。



古澤 拓郎 Takuro FURUSAWA
 furusawa.takuro.3w@kyoto-u.ac.jp

ソロモン諸島を皮切りに、海域アジア・オセアニアの自然環境と人々の暮らしと健康を研究。村における緻密なフィールドワークから、国・国際関係という大きなスケールにおける衛星画像/GISを用いたインフォーマティクスまで。



坂本 龍太 Ryota SAKAMOTO
 sakamoto.ryota.7c@kyoto-u.ac.jp

肺炎を起こすレジオネラ症の研究を通じて環境と人間の関わりについて興味をもっている。そして、プータンを中心にヒマラヤ地域に暮らす高齢者の健康、人々の生き方やしあわせについても関心をもって研究している。

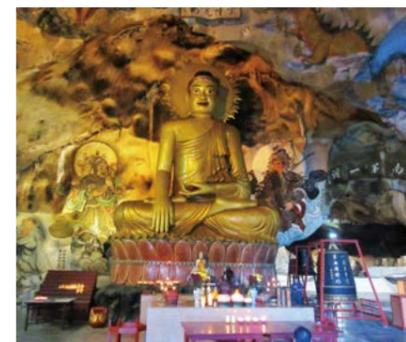


岡本 正明 Masaaki OKAMOTO
 okamoto@cseas.kyoto-u.ac.jp

東南アジア、とくにインドネシアの政治を研究。これまでは主に東南アジアの地方政治について研究していた。最近では、ソーシャルメディアが生み出した新しい政治のあり方について、ビッグデータをもとに分析し始めている。



ナイトマーケット(ミャンマー、ネピドー)



ペラ洞窟の仏像(マレーシア)

町北 朋洋 Tomohiro MACHIKITA
 machi@cseas.kyoto-u.ac.jp

国際分業の一角を担うアジアの産業高度化の実践経験はどのような教訓を与え、外国と日本の相互依存関係の進展は産業立地を通じて世界の雇用をどれほど変化させるかを研究。近年は東南アジアの交通事故にも取り組む。



アフリカ 地域研究 専攻

詳細はこちら
https://www.africa.asafas.kyoto-u.ac.jp/af_staff/staff/



- 生業生態論講座
- 社会共生論講座
- アフリカ潜在力講座

伊谷 樹一 Juichi ITANI
 juichi.itani.4v@kyoto-u.ac.jp

タンザニアにおける農業・牧畜・林業の動態を生態環境と人間生活の視点から研究している。最近では、20世紀初頭に持ち込まれた外来樹がタンザニアの農業・環境・経済・物質文化におよぼす影響に注目している。



大山 修一 Shuichi OYAMA
 oyama.shuichi.3r@kyoto-u.ac.jp

アフリカ各地の人びとの暮らしとその変化を調査し、地域の特性に応じたフィールドワークに取り組んできた。都市の有機性ごみや下水汚泥を活用し、緑化や環境問題の解決、農業生産の向上や飢餓・貧困の解決といった社会課題に取り組む。



安岡 宏和 Hirokazu YASUOKA
 yasuoaka.hirokazu.7n@kyoto-u.ac.jp

コンゴ盆地の熱帯雨林を主なフィールドとして、人間と自然の連関と共生に関する生態人類学・マルチスケーゼ歴史生態学の研究をしている。また、多様なアクターによる知識の共創について実践的研究をしている。



佐藤 宏樹 Hiroki SATO
 sato.hiroki.2e@kyoto-u.ac.jp

マダガスカル島の熱帯林を主な調査地とし、動植物の生態を研究してきた。近年は熱帯林がもたらす生態系サービスを利用する地域住民の活動も調査対象とし、民族生物学や環境社会学の観点から持続可能なランドスケープ管理について模索している。



齋藤 美保 Miho SAITO
 saito.miho.2w@kyoto-u.ac.jp

動物行動生態学的の視点から、キリンの子育てを通して彼らの対捕食者戦略について研究。近年は、キリンを中心とした野生動物と人びとの共存のあり方や、人々の動物観についても調査を開始。フィールドはタンザニアと南アフリカ。



塩谷 暁代 Akiyo SHIOYA
 Shioya.akiyo.6s@kyoto-u.ac.jp

カメルーンおよびウガンダの都市と農村の調査をつうじて、都市と農村のつながり、農と食に関わる研究をおこなっている。また、都市と農村の循環に着目したアクションリサーチに取り組んでいる。



平野(野元) 美佐 Misa HIRANO (NOMOTO)
 hirano.misa.5s@kyoto-u.ac.jp

カメルーンの都市に暮らす人びとの生活を、仕事、相互扶助、都市＝農村関係、庶民金融に焦点を当てながら研究している。また、カメルーンと比較しながら、沖縄の相互扶助や祝儀、庶民金融などについても研究している。



高田 明 Akira TAKADA
 takada.akira.2z@kyoto-u.ac.jp

相互行為の人類学のアプローチから南・中部アフリカで以下の研究に取り組んでいる。養育者・子ども間相互行為、環境の知覚と道徳実践、エスニシティの変容、在来社会の再編と教育、マイクロ・ハビタットとハビトゥスの相互構築。



金子 守恵 Morie KANEKO
 kaneko.morie.3z@kyoto-u.ac.jp

アフリカの日用品に注目し、それを生産する知識や技術とその継承、さらには技術的な革新について研究を進めている。学際的な研究を基盤にした参加型生活道路建設と補修にかかわる開発実践プロジェクトにも従事している。



阿毛 香絵 Kae AMO
 amo.kae.6c@kyoto-u.ac.jp

西アフリカのイスラーム社会、特にセネガルのスーフィー教団と、高等教育、政治との関連について研究してきた。メディアや若者文化、都市文化にも着目し、アジアやより広いイスラーム圏との比較の観点からも研究を進めている。



山越 言 Gen YAMAKOSHI
 Yamakoshi.gen.4s@kyoto-u.ac.jp

西アフリカ・ギニアの農村景観の成り立ちと、そこに生息する野生動物の生態や保全状況、人びとの生活との相互関係を研究している。人と動物とがともに生きるための適切な仕組や距離について考えている。



原田 英典 Hidenori HARADA
 harada.hidenori.8v@kyoto-u.ac.jp

南部・東アフリカの複数の国を対象とし、野外調査と実験室分析を組み合わせ、参加型水・衛生実践、下痢リスク管理、循環型トイレの持続性、気候変動と水・衛生インフラ、水環境保全などの研究と社会実践をおこなっている。



中尾 世治 Seiji NAKAO
 nakao.seiji.2i@kyoto-u.ac.jp

フランス語圏西アフリカのブルキナファソを中心とした、宗教、政治、経済、思想の歴史を研究。また、歴史研究のメタ理論、人類学の理論と人類学史にも関心をもち、工学、建築学、現代美術、科学コミュニケーションなどとの共同研究もおこなっている。



グローバル 地域研究 専攻

詳細はこちら
<https://www.global.asafas.kyoto-u.ac.jp/staff/>



- 平和共生・生存基盤論講座
- イスラーム世界論講座
- 南アジア・インド洋世界論講座

中溝 和弥 Kazuya NAKAMIZO
 nakamizo.kazuya.3z@kyoto-u.ac.jp

現代インド政治を専攻。政治的暴力をいかになくすかという関心のもと、民主主義と暴力・貧困の関係を軸にインドで長期のフィールドワークを展開。近年はヒンドゥー至上主義研究に加え、南アジアの比較政治にも取り組む。



長岡 慎介 Shinsuke NAGAOKA
 nagaoka.shinsuke.6v@kyoto-u.ac.jp

イスラーム経済と呼ばれる宗教と経済が融合した新しい経済実践の思想および実態を中東と東南アジアでのフィールドワークを通じて解明しながら、そのポスト資本主義的可能性や日本社会への応用について探究している。



ローハン・デスーザ Rohan D'Souza
 dsouza.rohanignatious.6x@kyoto-u.ac.jp

南アジアにおける河川、ダム、漁場などの環境史を専門としている。現在の研究関心は鉄道や航海の技術の政治、そして気候変動をめぐる環境政治である。また、アナログからデジタルに移行する高等教育にも関心がある。



東長 靖 Yasushi TONAGA
 tonaga@asafas.kyoto-u.ac.jp

従来「イスラーム神秘主義」と訳されてきたスーフィズムの思想研究を中心に、タリーカや聖者信仰という民間信仰も含んで考察。近年は神秘体験で得られた真理をどう芸術的に表現するかや、スーフィズムを核とした穏健イスラームにも興味がある。



長岡 慎介 Shinsuke NAGAOKA
 nagaoka.shinsuke.6v@kyoto-u.ac.jp

* 兼任 「平和共生・生存基盤論」参照

帯谷 知可 Chika OBIYA
 obiya@cseas.kyoto-u.ac.jp

ウズベキスタンを研究対象として中央アジアの近現代史・地域研究に従事。ソ連体制下の社会主義的近代化の諸相、それを継承したポスト社会主義期、さらにそれが後退していくポスト社会主義以後の社会変容に着目中。



中西 竜也 Tatsuya NAKANISHI
 nakanishi.tatsuya.7s@kyoto-u.ac.jp

16-20世紀の中国ムスリム(漢語を話すムスリム)がいかに非ムスリム中国人と共生してきたかを主に文献から研究。最近では、19世紀に西・南・中央アジア由来のイスラーム新思想をどう受容したかに関心がある。



黒田 彩加 Ayaka KURODA
 kuroda.ayaka.6w@kyoto-u.ac.jp

現代イスラーム思想を専門としている。エジプトを中心に、イスラームの伝統と近代的な価値観の調和をめざす改革派思想の展開について研究してきた。中東諸国における宗教と政治の関係についても関心をもっている。



イスファハーンのシャイフ・ロトフォラー・モスク(イラン)



先住民タルーの人たちの踊り(ネパール)

藤倉 達郎 Tatsuro FUJIKURA
 fujikura.tatsuro.6a@kyoto-u.ac.jp

ネパールにおける長期フィールドワークにもとづいて、開発批判の人類学、暴力的・非暴力的社会運動、近年はとくに先住民タルーの権利運動について論じてきた。医療や食物、価値論や多文化主義についても関心をもっている。



中溝 和弥 Kazuya NAKAMIZO
 nakamizo.kazuya.3z@kyoto-u.ac.jp

* 兼任 「平和共生・生存基盤論」参照

池亀 彩 Aya IKEGAME
 Ikegame.aya.5u@kyoto-u.ac.jp

人類学や歴史学の方法を用いて、インドの王権やグール(宗教指導者)など権力の多様なあり方を研究してきた。最近ではギグ・エコノミー、民族学博物館における部族文化表象、インド系移民にも関心をもっている。



ローハン・デスーザ Rohan D'Souza
 dsouza.rohanignatious.6x@kyoto-u.ac.jp

* 兼任 「平和共生・生存基盤論」参照

井上 春緒 Haruo INOUE
 inoue.haruo.7m@kyoto-u.ac.jp

北インド古典音楽であるヒンドゥスターニー音楽を研究している。とくに、南アジアを代表する打楽器タブラの演奏技法や、その歴史的・文化的背景を包括的に探求し、インド音楽の芸術的価値を明らかにすることをめざしている。



ASAFASに集うのは、フィールドワークに憧れる学生たちや、海外でのボランティア経験者、留学生など、多彩な顔ぶれ。大きな目標を掲げて我が道を切り拓き、きのうの自分を超越してゆく、たくましい同志たち。あなたはどんな5年間をすごしますか？

1年次 2年次 3年次 4年次 5年次 卒後

A群科目: 専攻科目	各専攻の講義と演習 ●ゼミナール形式の演習授業での発表・討論					
B群科目: 共通科目	「地域研究論」をはじめとした地域研究の基礎的アプローチの習得、関連語学		5年次までにA・B・C群科目を受講し、博士論文提出に必要な40単位を取得		関連語学 ●タイ語 ●インドネシア語 ●ベトナム語 ●ビルマ語 ●アラビア語 ●ネパール語 ●トルコ語 ●ヒンディー語 ●スワヒリ語 ●アムハラ語 など	
C群科目: 他専攻・他研究科開設科目						

教室外の研究活動 (フィールドワーク)

- アジア・アフリカのフィールドステーションでの活動
- 海外の学術交流協定締結校での活動
- 研究会への参加 ●情報収集/発表スキル向上/ネットワーク構築

臨地語学実習 I 臨地実習 I 臨地語学実習 II 臨地実習 II 臨地実習 III

Aさん 23歳で学内進学

中学生のときに見たドキュメンタリー番組に感動し、海外で活動する研究者に憧れ、フィールドワークを重視する京大に進学。学部生のころからASAFASの教員の論文を読み、研究室を訪ねて情報収集に励んだ。

宗教思想に関心があります!

文・理の科目をいっぱい受講。語学演習や研究会などにも積極的に参加。

ねえ、たまにはひと休みしようよ...

荷物多すぎない?

教員が伴走しながら、京大の支援プロジェクトや日本学術振興会特別研究員(DC1)に申請。コミュニティと宗教の関係、教育環境への関心が高まり、博士論文のテーマがすこずつ見えてきた。教員との面談やゼミでの議論をとおして、論点をさらに絞り込む。

先行論文を読み込んだり、調査地の社会情勢を調べたりするのもいいだね。

日本学術振興会特別研究員に採用され、民間の研究助成金も獲得。資金のめどがたち、現地の大学に留学。図書館にこもって一次資料を閲覧したり、古書店をめぐって貴重書を集めたり、現地の研究者たちとのネットワークづくりに励む日々。

いつのまにか、現地の言語もペラペラだ!

博論執筆に向けて、現地調査にますます熱が入る。滞在中は、ASAFASのオンラインマガジン(一P.18)への投稿がよい息抜きに。

すっかり研究者の顔つきになったね。

日本学術振興会の海外特別研究員として、欧米の研究機関に赴任。

Bさん 23歳で学外から進学

「百聞は一見にしかず!」が信条。「将来は海外で活躍したい!」という漠然とした夢をいっただいて、1年次から海外に行けるASAFASに。研究テーマも修了後の進路も、フィールドワークを重ねながらじっくり考えたい。

どこでもすぐに眠れて、表情と身ぶりだけで会話できることが特技!

関心のある農業問題を中心に、幅広い分野の講義を受けて、見識を広げる。

オッシャー! やるぞ!

農業問題をテーマに、予備論文執筆に向けてフィールドワークや指導教員との討議を重ねるなかで、現地で実務者として貢献したいという気持ちが高まっていく。

初めてのフィールドワーク先で、NGOのスタッフと出会い、研究成果と現地の実践者たちをつなぐ役割にも関心が深まる。

博士予備論文を提出して退学

NGOへの就職が決まり、海外赴任。臨地演習に訪れるASAFASの後輩たちのサポートにもかかわる。

行ってきまーす!

キャリア・ディベロップメント室

進路選択や就職活動についての相談に、メールや面談形式で随時対応。就活に役立つセミナーや講演会も適宜開催。学生たちの修了後の進路を見え、学生一人ひとりの能力や個性と向き合いながら、丁寧なサポートを心がけています。(一P21)

院生・研究生を対象とした懇談会

Cさん NGO勤務を経て27歳で入学

大学卒業後5年間はNGO職員として中東で難民支援に従事。この間に結婚。キャリアアップするには学術的知見が不可欠と実感し、ふたたびアカデミアの世界に。海外経験豊かな「頼れるメンター」として後輩に人気。

社会経験をいかし、大学院でさらにステップアップしたい!

5年間の実務経験をふまえて、指導教員たちと面談を重ね、調査地と研究テーマ、滞在期間を決める。将来の妊娠・出産を視野に入れて、共通科目・専攻科目をいっぱい受講。幅広く知見を深めながら、博士予備論文のテーマを模索。

学内・学外の支援制度を活用して、3か月間のフィールドワークに。

民間の奨学金を獲得し、1年半のフィールドワークに。NGO時代の人的ネットワークも活かして、活動域を開拓。博士論文のテーマがより鮮明になってきた!

妊娠がわかり、出産後2年間は子育てを優先すると決める。博士予備論文提出に向けて、執筆に励む。

海外での経験が豊富だから、現地になじむのもあっという間だね!

いつか一緒にフィールドワーク行こうね!

復職の準備は、着々と進んでいるね。

博士予備論文を提出し、休学届を提出

休学中もゼミ仲間と連絡をとりあい、近況報告。学会などにも参加して情報収集に努める。

31歳(子どもは2歳)で3年次に復学

「子育ても研究活動も、すべてまとめて、私らしく」。学内外の女性研究者支援事業やASAFASの子育て支援制度や助成金などを活用して、学業と育児を両立。ASAFASの託児室(交流室)のヘビーユーザー。

子育てで介護を担う人が大学に通ったり、フィールドワークに出かけることには、多くの困難があります。ASAFASでは、「子育てフィールドワーカーWG」が中心となって、子育てで介護等しながらフィールドワークをする研究者や事務職員たちの悩みによりそい、知恵を出しあって支援しています。

子育てで支援事業や助成金を活用し、積極的にフィールドに

フィールドステーションを活用し、子連れでフィールドワークに。家族そろって海外に長期滞在することも。

2年後に博士号取得

博士号取得に必要な単位を取り、家族とともに海外移住。現地日本人企業で働きながら、博士論文の提出をめざす。

エキスプローラープログラム

ASAFAS附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター(COSER)は、日本学生支援機構の海外留学支援制度等を利用しながら、フィールドワークや語学実習のための海外渡航費や滞在費を補助しています。

事業の詳細はこちら

日本学術振興会 特別研究員制度

日本の優れた若手研究者に対して、自由な発想のもとに主体的に研究課題等を選びながら研究に専念する機会を与え、研究者の養成・確保をはかる制度(毎年5月に申請締切)。ASAFASでは、毎年多数の院生が特別研究員に採用され、支援を受けています。

ASAFAS3年次以上の学生数に **27.1%** 占める特別研究員の割合(2024年5月1日現在)

Dさん 他大学で修士号取得後、27歳で「3年次編入」

修士課程で地域研究への関心が高まり進路変更。地域研究のハブ機能と実績、海外研究者との人脈、蓄積された文献・データの量と質に惹かれ、「ASAFASしかない」と志願。

希望する指導教員のもとをたびたび訪ねて、編入後のキャリア形成のイメージトレーニングを重ねる。

編入試験に合格し、3年次編入

4年次の1年間はフィールドワークに専念できるように、3年次に共通科目・専攻科目を貪欲に受講。

キミ、熱いなあ…。その情熱に溶けてしまえそう...

「1年間は帰ってこない!」と決めて、いざフィールドに! 現地調査、レポート執筆、資料収集などを重ね、学会発表の経験も積む。現地で知りあった海外の研究者仲間とのネットワークもどんどん広がる。

1年後に博士号取得

3年前に描いた夢が、どんどん実現してゆくね。

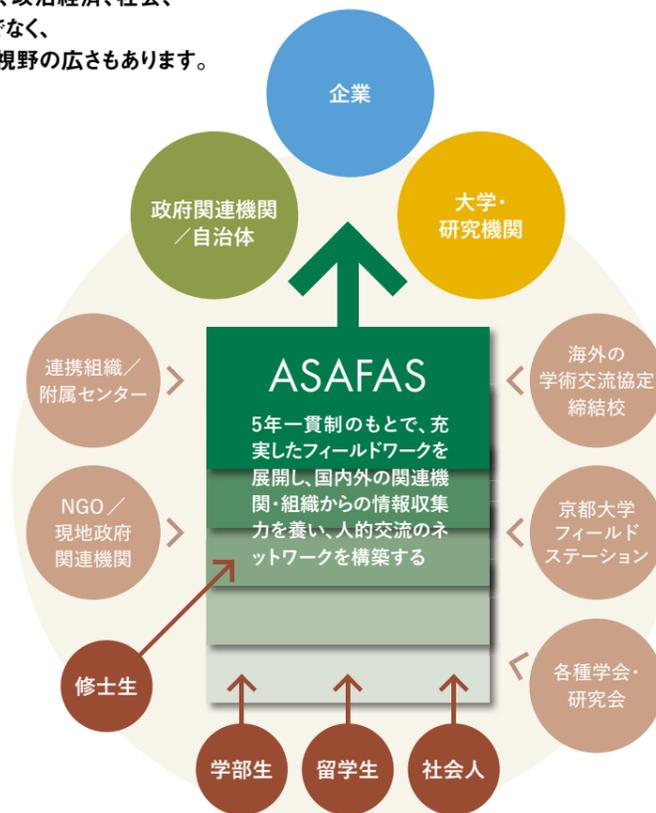
水を得た魚とは、まさにキミのことだね。

政府関連機関に就職。ネットワークはますます広がる。



分野・業界を超えて活躍する院生たち

ASAFAASの修了生は、アジア・アフリカ地域の自然、生態、生業、政治経済、社会、文化などについての深い知識と調査経験を身につけているだけでなく、さまざまな地域特性のなかでそうした専門知識を総合的に捉える視野の広さもあります。5年をかけて培った能力は就職活動にも存分に発揮され、多くの修了生が国際的な場で幅広く活躍しています。



アジア・アフリカ関連分野への関心

近年、地域研究や国際協力・開発論、文化人類学など、アジア・アフリカ関連分野への関心が高まるなかで、ASAFAASの修了生の多くは、国内外の大学や研究機関の地域研究者として、先導的な役割を担っています。

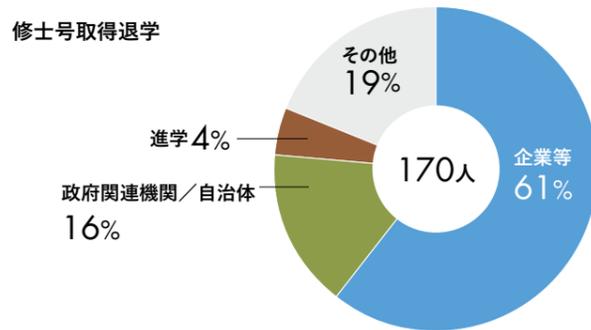
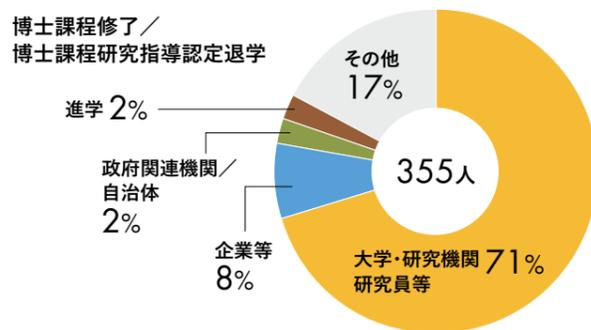
現地調査で磨いたポテンシャル

地域研究には直接に関係しない分野に進んだ先輩たちも、フィールドワークで培ったバイタリティ、広い視野、現場の状況に臨機応変に対応して問題解決する能力を存分に発揮して活躍しています。

グローバル人材への期待

グローバル化の進展で、日本とアジア・アフリカ地域との関係も複雑に深化しています。国際機関や国際NPOはもちろん、政府系機関や一般企業では、これらの地域に対する専門的知識を有する「グローバル人材」が求められています。ASAFAASでの学びは、その期待に応える能力の礎となっています。

▶ 修了生・離籍者(581人)の進路 (2015年~2023年度)



■研究職

【大学・研究機関】愛知教育大学/大阪大学/大阪市立大学/岡山大学/九州大学/京都大学ASAFAAS/京都大学アフリカ地域研究資料センター/京都大学東南アジア地域研究研究所/神戸大学/自治医科大学/政策研究大学院大学/東京医科大学/東京外国語大学/東京大学/同志社大学/東洋大学/名古屋大学高等研究院/明治学院大学/立命館大学/龍谷大学/国際協力機構/日本学術振興会/日本私立大学協会/(公財)リバーフロント研究所/国際環境NGO FoE JAPAN/カメルーン国立農業開発研究所/アイ・シー・ネット(株)【政府関連機関/自治体】在クウェート日本国大使館/在タイ日本大使館/在タンザニア日本大使館/在ホーチミン総領事館/在南アフリカ共和国日本大使館/大阪地方裁判所/外務省/農林水産省農林水産政策研究所

■民間企業・公益法人等

【企業】アイ・シー・ネット(株)/(株)アカツキゲームス/(株)アカリク/アクセント(株)/(株)朝日新聞出版/アビームコンサルティング(株)/(有)アフリカンスクエア/アマゾンジャパン(同)/AWS Japan/(株)インダ/井関農機(株)/出光興産(株)/インテル(株)/江崎グリコ(株)/NHK/NTCインターナショナル(株)/(株)NTTデータ/エンヴィックス(有)/岡谷鋼機(株)/Capgemini Japan/Google/(株)クニエ/(株)公文教育研究会/KBS京都/(株)講談社/コクヨ(株)/(株)小松製作所/コンチネンタル・オートモーティブ(株)/(株)サイバー・ジャパン/サラヤ(株)/(株)シー・ディー・シー/インターナショナル/JFEエンジニアリング(株)/シャープ(株)/日本製鉄(株)/住友商事グローバル・マルズ(株)/住友商事(株)/住友電気工業(株)/全日本空輸(株)/(株)ソフィア/SoftwareONE JAPAN(株)/ダイキン工業(株)/(株)大創産業/(株)大和総研/(株)タスク・アソシエーツ/東京海上ディール(株)/(株)東洋経済新報社/豊田通商(株)/日本通運(株)/日本電気(株)/(株)日本総合研究所/ニデック(株)/(株)共立ソリューションズ/(株)農林中金総合研究所/阪和興業(株)/フィッシャー・クリニカルサービスジャパン(株)/富士通(株)/富士電子工業(株)/ミズノ(株)/三井住友信託銀行(株)/三井住友トラスト・アセットマネジメント(株)/三井物産(株)/三菱鉛筆(株)/三菱重工業(株)/三菱商事(株)/(株)モンベル/ヤマハパワーテック/ロジック(株)/(株)読売新聞西部本社/LINEヤフー(株)/楽天グループ(株)/(株)ワタナベ楽器店

【官庁/自治体、その他】国税庁/農林水産省/大阪府/京都府/東京都/共同通信社/国際協力機構/国立高専/トヨタ財団/日本貿易振興機構/立命館大学

学生たちの修了後の進路を見すえ、
学生一人ひとりの能力や個性と向き合いながら、
丁寧なサポートを心がけています

キャリア・ディベロップメント室

ASAFAAS附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター(COSER)は、学生たちのキャリア支援に取り組む「キャリア・ディベロップメント室」を設置しています。

おもな活動

- 進路選択や就職活動についての相談に、メールや面談形式で随時対応
- エントリーシート、面接や適正検査(SPI)対策のマニュアルなど、就活に役立つ書籍を貸出
- 個別の求人情報、インターン情報を、メールで配信
- 就活に役立つセミナーや講演会を適宜開催

▶ 懇談会の定期開催

研究職だけでなく、民間企業への就職を含めた幅広い視点でのキャリア形成促進をめざして、院生・研究生を対象に、懇談会を定期的で開催しています。多様な業界で活躍する先輩たちをゲスト招き、在学時の経験談や現在の業務内容などをお話いただき、講演後には議論の場も設けています。就職活動と長期現地実習をどう両立させるのか、ASAFAASでの知識や経験は就活や現在の仕事にどう活かされているのかなど、先輩たちのリアルな体験談は好評で、毎回多数の院生・研究生が参加しています。



前略 ASAFAAS殿! 修了生からの応援メッセージ

殿内 海人さん

独立行政法人 国際協力機構(JICA)

JICAに所属して5年。現在は、コンゴ民主共和国に駐在し、保健医療や環境保全などの分野のプロジェクト形成・マネジメントに従事しています。ASAFAASで培ったのは、調査現場で出会う人々を尊重しながら、一人ひとりと真摯に向き合うなかで社会の文脈を読み取る力。フィールドワークで身につけたこの姿勢は、就職活動において、自信をもってアピールできる私の強みとなりました。

JICAでの業務では、多様な国・地域の人たちとともに物事を進める機会が多々あります。共通のゴールに向かってプロジェクトを進めるうえで大切なのは、信頼関係を構築する力、相手がどのような論理の体系に立っているかを理解する力。どちらもASAFAASで私が手に入れた宝の一つです。



アフリカ地域研究専攻/2019年修了
在籍時の研究テーマ ▶セネガル都市部における宗教組織の編成原理の諸相

渡邊 駿さん

(一財)日本エネルギー経済研究所 中東研究センター

国内のシンクタンクで、中東情勢に関する分析と情報発信に従事しています。広い地域を対象に、情勢動向をつぶさに追い、的確に分析することが求められる日々。ASAFAAS時代にフィールドワークに基づく視座の広い研究をとおして得た知見と、現地で出会った人たちの姿が、私の分析力を裏づけ、自信を与えてくれます。

日々の業務では、ほかの人とは異なった視点からのアイデアの提示や、専門的な知見をもたない顧客へのわかりやすい情報発信を心がけています。こうした姿勢にも、専門分野を超えて多くの仲間や先生方と議論を重ねたASAFAASでの経験が生かされていると感じます。



グローバル地域研究専攻/2018年修了
在籍時の研究テーマ ▶現代中東君主制の体制維持メカニズム

鈴木 愛さん

立命館大学 OIC 総合研究機構 助教

現在は、主にバングラデシュとミャンマーで、小型のネコ科動物の保全の研究と実践に取り組んでいます。研究のプロセスに現地の行政職員や住民を巻き込みながら進めると、想定以上の波及効果が生まれることがあります。「なにが起こるかわからない」。それが現場で研究と実践を同時に進める醍醐味で、すべて含めて楽しんでいます。

自身の問題意識や、保全現場の実情と徹底的に向き合うことができること、それがASAFAASを選んだ理由です。分野の壁だけでなく、学術の枠組みも超えて問題解決の道を追い求めることができる自由な環境にも惹かれました。長期にわたってフィールドで暮らし、多様な立場の視点で保全の課題を観察すればするほど、解決策が見えなくなることもありました。しかし、暗中模索だったがゆえに、現場で体験して身につけたこと、現地の人たちから学んだことが、私の大きな強みになったのだと思います。



東南アジア地域研究専攻/2017年修了
在籍時の研究テーマ ▶カンボジア北部における小型食肉目の保全

未来の仲間を待っています

学生の受け入れ

ASAFASでは、アジア・アフリカ地域に強い関心をいだく学生たちの入学を期待しています。国内の学生だけでなく、留学生や社会人も積極的に受け入れています。

出願から入学まで

4月 募集要項等の詳細公開
(研究科WEBサイト)

8月 出願書類の提出期間
各専攻の募集要項を確認し、必要書類を提出してください。

※出願書類の書式はすべて本研究科のWEBサイトで入手できます。
ダウンロードして各自で印刷した用紙(A4サイズ)を出願書類として使用してください。
<https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/admissions/application>



9月 入学試験
1次試験と2次試験に分けて実施します。2次試験は1次試験合格者を対象とします。

1次試験(筆答試験)



アジア・アフリカ地域研究に関する基礎学力と、英文読解力を問います。

2次試験(口述試験)



アジア・アフリカ地域研究をおこなううえでの適性を判断します。

9月 合格者発表



4月 大学院入学式

3年次編入

3年次の学年に欠員がある場合にのみ募集します。大学院の博士前期課程(修士課程)を修了、または修了見込みの者で、本研究科の博士予備論文と同等またはそれ以上の研究能力を有する方が対象です。修士論文の審査および口頭試問によって、編入の可否を判定します。



専攻別入学者
出身大学(学部)一覧
(2016-2018年度)



Admission policy

ASAFASの望む学生像

ASAFASの学生に求める資質は次の5つ。

- ① 総合的な基礎学力と国際的視野
- ② アジア・アフリカ地域の自然・社会に対する強い知的関心
- ③ フィールドワークに必要な柔軟な思考と言語運用能力
- ④ 問題発見・解決の能力と論理的思考力
- ⑤ 研究者・実務者に必要なコミュニケーション能力と倫理性、責任感

社会人経歴やアジア・アフリカ地域でのボランティア経験のある方、外国人留学生も積極的に受け入れます。多様なバックグラウンドをもつ学生間の交流が豊かな人間性を育み、研究視角を広げるからです。専門分野の基礎知識や、アジア・アフリカ地域の自然や社会の特質に対する理解力、先行研究の読解や研究成果の発表、国際的な共同研究の遂行に必要な英語の能力も必須。こうした基礎学力を確認するために、大学院入学試験では、1次試験(筆答)、2次試験(口述)を実施し、総合的に合否を判断します。

オープンキャンパスでASAFASの風を浴びよう!

3つの専攻それぞれに、年に数回、オープンキャンパス(大学院説明会)を開催しています。普段着のASAFASに出会える貴重な機会です。教員との個別面談や院生たちとの座談会は、実体験満載! ぜひご参加ください。

おもなプログラム

※専攻ごとに異なります

専攻長のメッセージ/各専攻での学びの特徴/入学から学位取得までの流れ/入試に向けてのアドバイス/修了後の進路について/教員による講演会/教員との個人面談/大学院生との座談会 など

入学への迷い・不安は、気軽に相談してください。



▶ オープンキャンパスなどで学生から寄せられる質問の一例

Q これまでいっしょ海外には行ったことがありません。そんな私でも、長期のフィールドワークができるでしょうか。

A 海外経験がなくても心配はいりません。「ASAFASに入って、はじめて海外に行った!」という院生は少なくありません。経験豊かな指導教員や先輩たちが、その経験と知恵を惜しみなく伝授/サポートします。ASAFASと協力関係にある現地の研究機関のスタッフや研究者たちも心強い存在です。なによりだいじなのは、「なにを知りたいのか」というあなたの問題意識、そして強い意志と好奇心です。現地の人や文化などに馴染み、経験を積みれば成果は眼前です。

Q 将来は海外のNGOで働くのが夢ですが、語学に自信がありません。

A ASAFASには、タイ語、インドネシア語、ヒンディー語、ネパール語、アラビア語、スワヒリ語、アムハラ語など、多様な語学科目があります。調査をしながら現地の語学学校に通う「臨地語学研修」のしくみも充実しています。「習うより慣れる」というように、現地の人たちとともに暮らすなかで、「話を聞きたい、知りたい、気持ちを伝えたい」という欲求が、語学力を引き上げます。

Q 渡航費や現地での活動費、研究資金などはどう確保するのですか。

A 研究科内のサポートとしては、院生のフィールドワークや学会発表、共同研究を支援する、附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター(COSER)のエクスポージャープログラムがあります(16ページ参照)。そのほか、日本学術振興会の特別研究員制度や、民間企業・団体などの支援制度を活用する方法もあります。ふさわしい制度の選択方法や申請手続きなどは、教員が伴走しながらこまやかにサポートします。個人の負担は極力抑えますので、安心してください。

Q 研究テーマを途中で変えることはできますか。

A 研究テーマに対して、時間をかけ、試行錯誤しながらも柔軟に取り組めるとい点が、5年一貫制の良いところです。現地に行って初めて気づくこともあります。調査地の社会情勢によって思うように調査が進まないこともあります。計画の立て直しが必要なこともあるでしょう。ゆきづまったときは、いちど立ち止まって研究手法を見直したり、指導教員群とじっくり相談したうえで、テーマ変更を検討することをお勧めします。先輩たちもアドバイスを授けてくれるはずですよ。

Q 研究テーマや指導教員は、入試前に決めておくほうがよいのでしょうか。

A 入学直後に指導教員を選択する必要があるため、あらかじめ決めておくほうが望ましいです。ASAFASでは、院生も一人の研究者としての自覚を求めます。なにを実現したいのか、どんな研究者になりたいのか、ASAFASでどんな5年間をすごしたいのか、能動的にビジョンを描いてほしいと願っています。よって、入学前から、興味のあるテーマに関連する先行研究を学ぶだけでなく、研究者を訪ねてみることをお勧めします。オープンキャンパスの個人面談の機会もぜひ活用してください。

Q 院生になったら、どんな一日をすごすのですか?

A ASAFASには院生室があり、1年次から専用デスクが与えられます。1年次は講義を集中的に受けることが多く、講義ごとに教室を移動しますが、授業の合間には院生室で自習できます。2年次以降は、フィールドワークに出かける院生が増えます。久しぶりに帰国した仲間たちと顔を合わせる機会が多いのも、この院生室です。仲間たちから現地の最新情報を仕入れたり、成功例や失敗談を共有しながら、フィールドワーカーとしてのスキルを磨きます。



Q 幼い子どもがいます。子どもを連れて大学に通ってもよいのでしょうか。

A ASAFASの百万遍キャンパス(京都大学総合研究2号館)には、空気清浄器などを備えた「子育て交流室」があります。子連れで出勤した研究者・事務職員が子どもを遊ばせたり、授乳したりもできます。年齢層にあわせたおもちゃ等も備えています。子ども同士、親同士が同じ空間・時間を共有することで交流が生まれ、子育ての情報交換、悩み相談ができる場になればと願っています。川端キャンパス(稲盛財団記念館)には、おむつ交換のできるトイレや授乳室があります。



2026(令和8)年度 学生募集

第1回試験

東南アジア地域研究専攻/アフリカ地域研究専攻/グローバル地域研究専攻
2025年9月10日(水)・11日(木)

第2回試験

アフリカ地域研究専攻のみ
2026年2月3日(火)・4日(水)



募集要項・入試情報のほか、大学院での活動に関する疑問や不安なども、下記事務局までお気軽にご連絡ください。
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 教務掛 TEL: 075-753-7374 / FAX: 075-753-7350

2023 「環インド洋地域研究センター(KINDOWS)」を設置

2021 ◆「アジア・アフリカ地域における未来空調コンセプトの創出及び事業性を考慮した普及ロードマップの策定を目指した共同研究」(ダイキン工業株式会社と共同、2021/4~)

2020 ◆「アフリカにおけるSDGsに向けた高度イノベーション人材育成のための国際連携教育プログラム」(2020/12~2025/3)

「附属次世代型アジア・アフリカ教育研究センター」を設置

2016 「ケナン・リファーイー・スーフイズム研究センター」を設立

◆「アジア・アフリカ地域対応の高度グローバル人材育成事業」(2016/4~2022/3)

2015 ◆「グローバル化にともなうアフリカ地域研究パラダイム再編のためのネットワーク形成」(2015/4~2018/3)

2014 京都大学ASEAN拠点の開所

これまでに蓄積してきた研究・教育活動を還元し、ASEAN諸国の大学・研究機関とともに地域の発展に資する活動を目的に設置。

2013 ◆「変貌するアジア・アフリカで活躍するグローバル人材の育成——国際臨地教育プログラムの開発と実践」(2013/4~2016/3)

2012 ◆「アジア・アフリカの持続型生存基盤研究のためのグローバル研究プラットフォーム構築」

(東南アジア研究所と共同、2012/10~2015/3)

◆「卓越した大学院拠点形成支援補助金」(2012/4~2014/3)

2011 ◆「グローバル生存学大学院連携プログラム」(防災研究所と共同、2011/12~)

2010 ◆「アジア・アフリカ地域を理解するためのトライアングレーション・プロジェクト」開始(2010/10~2013/3)

2009 グローバル地域研究専攻が加わり、現在の3専攻の体制が整う

2008 ◆「研究と実務を架橋するフィールドスクール」(2008/11~2011/3)

2007 ◆「地域研究のためのフィールド活用型現地語教育」(2007/11~2012/10)

◆「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」(東南アジア研究所と共同、2007/10~2012/3)

2006 「イスラーム地域研究センター(KIAS)」を設置

◆「『魅力ある大学院教育』イニシアティブ」(2006/10~2008年3月)

2003 オンライン・マガジン「アジア・アフリカ地域研究情報マガジン」創刊(10月)

2002 ◆「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成プロジェクト」

(東南アジア研究センターと共同、2002/10~2007/3)

2001 一般学術誌『アジア・アフリカ地域研究』創刊

1998 ◆「アジア・アフリカにおける地域編成」(東南アジア研究センターと共同、1998/4~2002/3)

アジア・アフリカ地域研究研究科の設置

*発足時は、東南アジア地域研究専攻、アフリカ地域研究専攻でスタート

1996 人間・環境学研究科に「アフリカ地域研究専攻」を設置

「アフリカ地域研究センター」を「アフリカ地域研究資料センター」に転換(学内措置)

1994 京都大学将来構想検討委員会に「アジア・アフリカ地域研究研究科構想 専門委員会」を設置(2月)

1993 京都大学大学院人間・環境学研究科の文化・地域環境学専攻内に東南アジア地域研究講座、アフリカ地域研究講座を設置

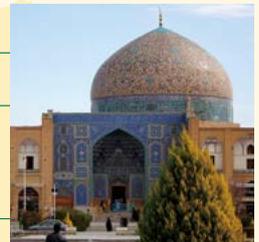
1986 「アフリカ地域研究センター」設立

1965 「東南アジア研究センター」設置(官制)

1963 「東南アジア研究センター」設置(学内措置、1月)



共有水栓で水汲みをする人々(ザンビア)



シャフ・ルトッフルラー・モスク(イラン)



「火災後の土地を森林に戻そう」シンポジウム(インドネシア)



京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科

問合せ先

京都大学 地域研究事務部 教務掛
〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町46
TEL: 075-753-7374(直通) FAX: 075-753-7350
URL: <https://www.asafas.kyoto-u.ac.jp>
e-mail: comm@asafas.kyoto-u.ac.jp



アクセス

百万遍キャンパス
東南アジア地域研究専攻/グローバル地域研究専攻
川端キャンパス
アフリカ地域研究専攻

